

銅造阿彌陀如来坐像【一向寺】 ■ ■ G・4



この仏像は第12代城主宇都宮満綱が願主となって、応永12年(1405)、長楽寺の本尊として造られました。明治2年(1869)、長楽寺が廃寺となったので、一向寺に移されました。衣全面に340人を越える寄進者の名前などの文字が刻まれ、その数は1105字。作者は、宇都宮を中心に活躍していた鋳物師秦景重で、鎌倉時代の作風を残した仏像です。この仏像には、この世に異変が起こる前になると汗をかくという伝説が残され、「汗かき阿彌陀」の名で親しまれています。五十里洪水や関東大震災の前日にも汗をかいたといえます。土・日曜日に拝観することができます。

【昭和25年8月29日 国指定】

蒲生君平勅旌碑 ■ ■ I・5



蒲生君平は、高山彦九郎、林子平とともに「寛政の三奇人」といわれ、明和5年(1768)宇都宮の新石町で生まれました。歴代天皇の御陵を調査して「山陵志」を著し修復の必要性を説いたほか、朝廷の官職についてまとめた「職官志」などを著しました。明治2年(1869)12月、明治天皇は、蒲生君平の著した書物やおこないが明治維新に大きな功績があったとして「君平の人となりはまことに立派であるからこれを広く天下に表して庶民に知らせるように」との勅令を下しました。当時の宇都宮藩知事の戸田忠友が奉行となり、宇都宮の入口に「この地が蒲生君平の里である」という碑を建てました。

【昭和36年9月18日 市指定】

木造地藏菩薩立像【延命院】 ■ ■ E・5



※拝観には、お寺の許可が必要です。

地藏菩薩は、人々を苦しみから解き放ち、寿命を延ばすといわれています。地藏堂に安置されているこの仏像は、全身金箔の寄木造りで、玉眼です。鎌倉時代の代表的彫刻師快慶の作風を伝えた造りで、関東では稀にみる傑作といわれています。この仏像は、毎月24日の縁日に開帳されています。

【昭和28年11月10日 県指定】

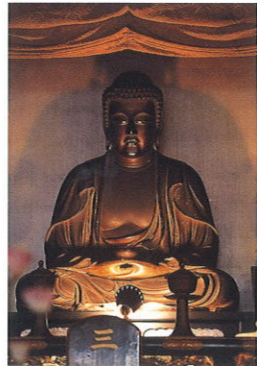
延命院地藏堂【延命院】 ■ ■ E・5



はじめ城内にあった延命院は、元和6年(1620)城主本多正純の城内拡張と町割りによって、現在地へ移されました。この地藏堂は、享保年間、芳賀郡田野辺村(現・市貝町)の宮大工永野右衛門の手によって完成しました。安永2年(1773)の大火や戊辰戦争、第二次世界大戦などの兵火でも焼けずに残った、市内では古い木造建築のひとつです。また境内には、市指定の樹齢350年、高さ18mのトチノキもあります。

【昭和36年10月4日 市指定】

木造釈迦如来坐像【興禅寺】 ■ ■ E・8



この仏像は、寄木造りで玉眼です。目をやや細め、わずかに首を前に傾けています。南北朝時代の作ですが、彫りが深く鋭いなど鎌倉彫刻の作風を残しています。仏像の底面に、北朝の年号文和元年(1352)と作者名「院吉・院広・院遵」が刻まれています。興禅寺は、正和3年(1314)、宇都宮8代城主貞綱が開いた寺で、かつては広大な境内に、多くの塔頭(寺の境内に建てた小祠)が並んでいました。

【昭和33年1月24日 市指定】

※拝観には、お寺の許可が必要です。

およりの鐘【宝蔵寺】 ■ ■ F・8



この鐘は、宇都宮氏の滅亡(1597)によって廃寺となった東勝寺(日野町通り北側一帯の地)にあったものです。江戸時代には夕暮れになると鳴らされたので、「およりの鐘」として親しまれていました。「おより(御寝り)」とは「お休みになる」の意味です。建造年代は不明ですが、鐘の中帯に宇都宮氏の家紋「三つ巴」が20個ほどついているので、宇都宮氏の寄進によるものと思われる。この鐘は、その後、様々ないきさつをたどって、昭和19年(1944)、宝蔵寺へ移され、今に至っています。

【昭和59年3月21日 市指定】

銅造盧舎那仏坐像【善願寺】 ■ ■ G・8



この大仏は享保20年(1735)、善願寺の栄枯和尚の願いにより造られ、「大豆三粒の金仏」として次のような伝説が残されています。大仏を造る資金が不足して困っていたとき、和尚は善願寺を訪れた旅の僧に願いを打ち明け相談しました。僧は大豆三粒を取り出し、これを境内に蒔き、実った大豆を多くの人たちに分けて増やしていけば、やがて資金がえられようと教えてくれました。和尚はすぐにこれを実行し、10年後には念願の大仏を造ることができたといえます。

【昭和33年5月15日 市指定】

不動堂(観音堂)【宝蔵寺】 ■ ■ F・8



光明山摂取院寶蔵寺不動堂(観音堂)は、平成14年(2002)に創設した宇都宮市の認定建造物制度施行後、第1号に認定された建造物です。天明8年(1788)創建といわれるこの不動堂は、唐様を基調として、絵様や建具など中世以降から伝えられる建築技術を踏襲し、小規模にしては彫刻類も豊富で、仏堂建築として見るべき建築要素を数多く含んでいます。

【平成15年3月27日 市認定】

赤門のさくら【慈光寺】 ■ ■ E・7



参道の石の欄干に食い込むように立っているヒガンザクラです。例年、3月下旬から4月上旬にかけて見事な濃いピンクの花を開き、春を告げる桜として市民に親しまれています。平成11年(1999)と平成28年(2016)の治療により支柱が加えられました。

【平成4年3月23日 市指定】

御蔵山古墳 D・6



この古墳は、6世紀前半ごろ造られた全長約62m、高さ約5mの中型の前方後円墳で、前方部を西北西に向けています。周辺からは土器や埴輪の破片が出土しています。墳丘は三段になっており、下半分は山をけずって形を整え、上半分を土を盛り上げて築いています。古墳のふもとには、近くの古墳から遺物が出土したことを伝える石碑「古棺記」が、頂上には「雷神社」があります。

【平成9年3月21日 市指定】

八幡山のクスノキ【八幡山公園】 D・7



江戸時代からここに生育していたと思われる、クスノキの巨木です。クスノキは主に関東地方より西の暖かい地域に分布している常緑高木で、これだけ大きいものは、栃木県内では珍しいものです。葉脈の分岐点に小さいいぼ状の点があり、中にダニの一種がいるのがクスノキの特徴です。開花は5月ごろで、黄白色の花が咲きます。

【昭和47年12月8日 市指定】

生福寺宝篋印塔【生福寺】 F・7



宝篋印塔とは、宝篋印陀羅尼経を納めた供養塔です。本塔は、宝暦13年(1763)、宇都宮の鋳物師戸室元蕃によって製作されたものです。昭和20年(1945)7月の宇都宮空襲により、相輪と笠が破損しましたが、平成9年7月に本堂前に再建されました。

【平成10年4月27日 市指定】



江戸時代宇都宮城下復元図